

連載

鉄道写真家 櫻井 寛

# 列車で行こう!

Let's go by train!

Railway-Photographer Kan Sakurai



## 第8回 「SL冬の湿原号」で行こう!



**北** 海道釧路地方の冬の人気列車が「SL冬の湿原号」である。11時5分、勇壮な汽笛が釧路駅の構内に轟き渡ると「SL冬の湿原号」は48km先の標茶(しべちゃ)駅を目指し発車した。先頭に立つ SLは1940年生まれのC11形蒸気機関車だが、御年86歳という年齢を感じさせない矍鑠たる走りが頼もしい。SLに続く古風な客車は、1号車と5号車が展望席付き「たんちょうカー」、2号車が売店のある「カフェカー」、3・4号車がダルマストーブ付きの「ストーブカー」の5両編成である。釧路駅を発車しておよそ15分、進行方向左側の車窓に遮るものの何もない大湿原が広がった。東西25km、南北36km、東京の都心部がすっぽり入ってしまう釧路湿原だ。ここには特別天然記念物のタンチョウをはじめ多数の野生動物が生息する。日本初のラムサール条約登録湿地でもある。運がよければ、列車からタンチョウやキタキツネ、エゾシカなどを眺めることができる。

ちなみに筆者が乗車した日は、往路は視認できなかったが、復路には十数羽のタンチョウを間近に望み、撮影することもできた。

車内では釧路湿原を眺めながらランチを楽しむ人も多い。私は釧路駅で求めた海鮮駅弁を着用し、カフェカーで購入した地ビールで喉を潤す。タンチョウで有名な、鶴居村産のクラフトビールだ。すると隣席のお客さんから「よかったら、おつまみにどうぞ」と、熱々のスルメが差し入れされた。たった今、ストーブカーのダルマストーブで焼いてきたのだそうだ。香ばしくて、うまいっしょ!

12時35分、終着の標茶駅に到着。北海道でも有数の酪農の町で5万頭もの牛を飼育している。出迎えてくれたのは、ミルクックさんとハッピーくるべえ。いかにも酪農の町のキャラクターだ。そして今宵の宿は「摩周湖ユースホステル」で決まり!



鉄道写真家 櫻井寛

1954年長野県生まれ。鉄道員を目指し昭和鉄道高校に入学したが、在学中に鉄道写真の魅力にとりつかれ写真家に転向、日本大学芸術学部写真学科卒。出版社写真部に15年間勤務。90年にフォトジャーナリストとして独立し、今日に至る。93年、航空機を使わず陸路・海路のみで88日間世界一周。94年『鉄道世界夢紀行』で交通図書賞受賞。旅した国は95ヵ国、渡航回数は250回超。写真集『列車で行こう! The Railway World』(世界文化社刊)など著書多数。日本写真家協会、日本旅行作家協会会員。東京交通短期大学客員教授。

